

SORA

web magazine 2012.nov. vol.02

高砂淳二が通い続けたハワイ。

毎回大切なことを教えてくれる人と場所が溢れている

この地で感じた「SORA」を美しい写真共にご紹介します。

photo & text : Takasago Junji

MAP
CLICK!

ハワイ・
Hawaii

tsumi-shima tsumishima.com
ダイバーの夢をつみあげていく島



(株)ワールドツアープランナーズ
www.wtp.co.jp

© 2012
World Tour Planners Co., Ltd.
All Rights Reserved.



ハワイ
Hawaii

驚き
Surprise

驚き Surprise

Hawaii

1人のハワイアンとの出会い

15年くらい前に何となく通い始めたハワイ。気持ちいい風が吹くなか、ウクレレの音が妙に心に響いた。音楽がピタッとハマった、妙に居心地がいい…。そんな、なんてことない理由から、ときどき家族で行くようになった。

2000年の夏に、近所の友人のお姉さんが住んでいるというので、家族でマウイ島に行って、ひと月ほど滞在することにした。もちろんマウイの自然を撮影するという目的もあった。その友人のお姉さんが、あるハワイアンを僕に紹介してくれた。カイボ・カネアクアさんという、60歳前ぐらいのちょっとカッコイイハワイアンだった。彼は、病気を患っている友人のお姉さんの父親を、ときどき来てはロミロミ（ハワイ式マッサージ）や薬草などを使って診てくれているということだった。つまり“ヒーラー”だった。彼は僕と一緒に海辺に出て、海岸に打ち上がっている海草などを手にとっては、これはどこに効く、こんな症状を緩和してくれる、などと話してくれたり、山に行くと、花や草をちぎっては、その効用を教えてくれたりした。

僕は、そんな人に会うのは初めてだったし、ハワイというところは、単なるリゾートというだけではなく、そこには先住民たちが今も暮らしていて、昔からの智慧を伝え

ながら暮らしている場所なのだ、ということを知った。カイボさんの話が面白くて、僕は彼のところに毎日通うことになった。心がいかに体に影響を及ぼすかということ、薬草のこと、自然の生き物のそれぞれの役目のこと、そして人間の役目についてなど、彼は毎日丁寧にそんなことを僕に教えてくれた。

そんな中で一番僕の心に響いたのが、人間がもって生まれてくる役目の話だった。「人にはね、自然全体がうまくバランスが取れるよう、見守る役目があるんだよ。」後で知ったのだけれど、ハワイ州にはモットーというのがあって「ウア・マウ・ケ・エア・オ・カ・アイナ・イカ・ポノ」（大地の生命は、人間の高潔な心によって保たれる）と昔から言われているのだ。「アロハ（愛情）を学ぶこと、これも大きな人間の役目なんだ。」とも教えてくれた。「アロハ」。これは単なるハワイの挨拶というだけでなく、ハワイアンたちが古来一番大事にしてきた、大切な言葉だということを知ったのだった。

“リゾート王国”という面とは一味違ったハワイ。先住ハワイアンたちに伝わる深い智慧には、今も本当に驚かされ続けている。



ハワイ Hawaii

ハワイで暮らすアザラシたち

Ocean

海

ハワイには固有のアザラシがいる。あんな暖かいところに、と不思議に思うかもしれないけれど、南の海に棲む珍しい“モンクシール”という名の絶滅危惧種に指定されているアザラシが、ハワイ諸島のまわりに暮らしているのだ。“モンク”というのは、お坊さん、修行僧などという意味の英語で、単独で行動し神出鬼没な修行僧のようだ、とか、頭がお坊さんのようだ、とかいう理由で、“モンク・シール(シールはアザラシのこと)”と呼ばれるようになったらしい。このモンクシール、絶滅危惧種に指定されているわりには、最近ハワイのいろんな島でわりと頻繁に目撃されるようになってきている。賑やかなオアフ島の、ワイキキの近くのビーチでも、たまに寝そべっているところを確認されたりもしているし、僕もオアフ島の、わりと大きなハーバーのある場所の近くで、水中で遭遇したこともある。ミッドウェイなど、北西ハワイ諸島に多く棲んでいるのだけれども、エサの減少などで人のいるハワイの島々に出没するようになったのか、あるいは、人間が、絶滅しそうだからといって手厚く保護していることで安心して近寄ってきてくるようになったのか・・・。生息数は1000頭ちょっとと年々減少してきているのだけれど、でもあんなかわいいアザラシがわりと簡単に見られるのは、正直嬉しい。

海の中で初めて出合った時、モンクシールは僕の目の前に近づいて来てくれて、タンクを背負って潜っている生き物が珍しかったのか、不思議そうな目で僕の顔を覗きこんでいた。こんな好奇心むき出しでコミュニケーションをしてくる生き物は、やっぱり写真を撮っていてとても楽しい。



Hawāii ハワイ



Romance
ロマン

tsumi-shima
ダイバーの夢をつみあげていく



過去と現在が交わる場所

今のハワイアン先祖は、その昔、タヒチ方面からはるばるカヌーに乗ってやってきたと言われている。何千キロもの距離を、計器もない時代に、星や波、風、太陽など自然を読みながら、風に揉まれて長い時間をかけてはるばるやってきたわけだ。この、古代のポリネシア人たちの高度な航海術を証明するために、ハワイの有志たちが集まり、“ホクレア”という昔のポリネシア人たちが使っていたのと同じようなカヌーを再現し、1976年にハワイ・タヒチ間の航海を再現した。その後、悲しい事故などもあったのだけれど、そのプロジェクトは続き、2007年には日本にも寄港し話題になった。日本に来た時、ハワイ沖で愛媛丸と米軍潜水艦が衝突した痛ましい事件のことを想い、訓練船・愛媛丸の母校などを訪れて献花し、その痛みを分かち合ってくれた。カヌーやその航海術は、ハワイアンたちのアイデンティティーでもあり、ホクレアの“巡礼”は、航海術の証明という意味合いを超えて、国と国との新しい架け橋的なニュアンスも帯びてきている。

その話とは別に、ハワイ、タヒチ、ニュージーランド、トンガ、サモアなど、ポリネシアの多くの島には昔から、“海の向こうに、「ハヴァイキ」と呼ばれる自分達の先祖がやってきたおおもとの場所がある”という、同じような内容の言い伝えが残ってい

る。大まかな内容はこうだ。太古の昔、海は今よりもかなり浅く、太平洋には大きな陸地が二つあり、人々はそこに住んでいた。ある時人間は神の花園を汚してしまったために、陸地は海の底に沈んでしまった。かろうじて残った小さな島々にほんのわずかの人々だけが生き残った。やがて、まわりの海の中のリーフが発達してきた。人々はカヌーを造り生き残りの人々や昔の大陸を探し求めた。海底の地形はさらに変化し、やがてサンゴ礁の小島が無数に現れ、それらがネックレスのように細いリーフで繋がっていった。人々は昔の仲間やバラバラになってしまった島々と、お互いに再会することができた。しかしその後、ふたたび海面が上昇し、サンゴ礁の島々は沈没し、ネックレス状のリーフは姿を消してしまった。その結果、同じ種族がバラバラに暮らす、今のポリネシアの状態になった。

「花園を汚してしまい海の底に沈んでしまった」、というところなどは、今の地球の状況を思わせる内容でもあり、まるでムー大陸沈没の話のようでもあり、おもしろい。

それにしてもハワイは、そんなロマンをかき立ててくれる言い伝えにこと欠かない、不思議な、神秘に満ちた島なのである。

行動 *Action*



Hawaii ハワイ

tsumi-shima
ダイバーの夢をつみあげていく島



Hawāii ハワイ

A 行動 *Action*



tsumi-shima
ダイバーの夢をつみあげていく



今、できることから始めよう

この前の大震災では、ご存じのように東日本は想像を絶する被害を受けた。震災後の、津波が街を飲み込んでいく映像は、今も僕の脳裏に焼き付いている。

僕の故郷は石巻で、当時は何日も実家の両親や親戚が無事なのかどうか、安否が一切つかめず心臓が張り裂ける想いだった。幸い両親は避難して無事だったが、実家は津波にやられ、海辺の家々は海に丸ごと持っていかれてしまった。その震災で押し流された漂流物が、北米大陸に漂着し始めているという。その漂流物は、近いうちにハワイ諸島にもどんどん漂着すると言われ、先日、漁船がハワイ島沖で発見された、という情報も聞こえてきている。そこで、ハワイに深く関わってきた者として、同じくハワイに深く関わってきた、旅作家の山下マヌーさん、ハワイ在住のプロサーファー・アンジェラ・マキさん、そしてフラ・マスターでありミュージシャンでもあるサンディーさんの3人とともに、その漂着物を処理するための費用を捻出す

るプロジェクトを立ち上げることにした。些細なことでも、何かアクションができれば、という想いが一致し、動き出すことになったのだ。

昔は、自然に戻る素材のものしか世の中にはなかったので、海に流せば何でも浄化してくれる、という感覚があった。しかし実際、プラスチックなどの溶けないものは、海の上を延々と巡り続けることになり、ハワイ諸島の北部海域あたりには、“太平洋ゴミベルト”と呼ばれる場所が存在していることも分かっている。海鳥がプラスチックゴミを食べて死んだり、不法投棄された漁網に絡まってモンクシールが死んでしまったり、ということももの凄く多く起こっている。

震災を経たことで、「家族でいられることの幸せ」や「助け合うことの素晴らしさ」など、気付くことも多かったけれど、そんな想いととも、自然と共存できる新しい暮らしについても、忘れずに考えていきたいと思う。

ハワイ漂着物プロジェクト

http://wesym.com/project/profile?project_id=90